

ツーリズムの視点からみた「メディアとしての絵葉書」の再検討

——戦前期のハルビンに関連する絵葉書を事例として——

毛 利 康 秀

1. はじめに

携帯電話やスマートフォン^①などの持ち運び可能なモバイル機器を利用して、写真つき電子メール（いわゆる写メール）^②を送ることは、今日ではすっかり日常的な風景となっている。もちろん、これはインターネットに代表される情報通信ネットワークの世界的な発達およびカメラ機能が内蔵されたモバイル機器の普及が進んだ二一世紀になって初めて可能となったものであるが、画像情報＋私信を相手に伝達するという意味では、絵葉書を用いたコミュニケーションが一世紀以上前から実現していた。例えば、旅行先で印象的な風景を友人に伝えたいと思えば、現地で相当す

ツーリズムの視点からみた「メディアとしての絵葉書」の再検討（毛利）

五四五（六二七）

風景の絵葉書を買い求め、簡単な私信を添えて投函すれば良かった。実際に、そのようにして旅先から届けられた風景の絵葉書が大量に現存している。すなわち、絵葉書は、写真つき電子メール（写メール）の起源ともいえるべき存在であったと言える。

本稿では「メディアとしての絵葉書」に焦点を当て、絵葉書に関する先行研究を概観した上でメディア的な特性を確認する。絵葉書は依然として身近な存在ではあるが、写真つき電子メールの普及とともに、実際に投函される機会は減少しつつある。現在のうちに絵葉書の誕生からインターネット時代の到来に至るまでの期間について、絵葉書の社会的位置づけがどのように変遷していったかについて検討することは意味があることと考える。

さらに、絵葉書が観光地で多く発売された歴史的な経緯を踏まえて、観光（ツーリズム）の視点を付け加える。具体的事例として、中国東北部（旧満州）の中央に位置する都市・ハルビン^③に関連した絵葉書を取り上げる。ハルビンは一九世紀末より帝政ロシアによって建設が開始された比較的新しい国際都市であり、その建設の初期から現在に至るまで多様な絵葉書が発行されているが、特に太平洋戦争前の時期に日本人向けの絵葉書が数多く発行され利用されている。当時ハルビンを訪れた日本人旅行者は、現地で絵葉書を買求め、近況報告を綴って内地に差し出した。受け取った家族や友人は、絵葉書に印刷された異国情緒あふれるヨーロッパ風の街並みの画像と率直な感想のメッセージによって、ハルビンに対するイメージをかき立てられたことだろう。

近年、ツーリズム分野における新しい研究動向として、映画やドラマ、小説、漫画、アニメーションなどのコンテンツ作品をきっかけに観光行動が誘発される「コンテンツツーリズム」^④に関する注目が高まっている。ハルビンは、その歴史の浅さゆえ伝統的な観光資源を持たないが、『ハルピン夜話』をはじめとする様々な小説や音楽等のコンテ

ンツ作品の舞台となって、日本人観光客の訪問意欲が喚起される都市となった。歴史的な伝統に頼らず、都市固有の雰囲気とイメージを画像によって表現するハルビンの絵葉書は、コンテンツツーツーリズムの源流をたどる事例として適当であると考ええる。

よつて、本稿ではハルビンから実際に差し出された絵葉書の基礎的な内容分析も行い、どのような絵柄の絵葉書がどのようなメッセージとともに送られたかについての把握を通して、ツーツーリズム研究、特にコンテンツツーツーリズムの視点からみた「メディアとしての絵葉書」の位置づけの再検討を試みる。

2. メディアとしての絵葉書に関する再検討

2-1. 絵葉書に関する先行研究

絵葉書は、近代的な郵便制度が発展していく中で、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて出現したメディアである。⁵ 絵画や人物をあしらった絵葉書も多いが、観光地をはじめとする風景写真の絵葉書もまた多い。ここでは、主にメディアとしての絵葉書に着目した日本における先行研究について取りまとめる。

田邊（二〇〇二）は、絵葉書について「特定の作り手から不特定多数への購者への伝達」と「特定の差出人から特定の受取人への伝達」という、二つのメディア性を持つと指摘した。⁶ 前者は、マス・メディアとしての特性に相当する。一九世紀から発達したマス・メディアの一つとして新聞が挙げられるが、二〇世紀前半の新聞は印刷技術の制約から紙面に写真を掲載することが困難であり、事件やニュースに関する画像情報を伝達する役割は絵葉書が担っていた。柏木（二〇〇〇）は、当時の絵葉書は、報道メディアとしての機能を有していたと指摘している。⁷ 一九二三年

(大正二二年)に関東大震災が発生した時、その惨状を伝える画像メディアとして大きな役割を果たしたのも絵葉書であった。木村・石井(一九九〇)の研究によると、惨状の激しいものや死体が写されたものまで人々はこぞって買い求め、警察から発売禁止になったものまでであるという。⁸⁾ 絵葉書は今日における写真週刊誌に相当する、写真ジャーナリズムの一翼を担う存在でもあった。後者は、パーソナル・メディアとしての特性に相当する。細馬(二〇〇〇)はコミュニケーションの手段としての絵葉書の性格を「漏らすメディア」として位置づけ、絵葉書ならではの特質について指摘している。橋爪(二〇〇六)もメディアとしての絵葉書に着目し、百年に及ぶ絵葉書の歴史と日本の近代史とを重ねて論じた。⁹⁾

絵葉書は、メディアとしてのみならず、文化的視点や美術的視点などからも研究されている。樋畑(一九三六一九八三)は¹⁰⁾、東西交通文化の流れの中から絵葉書の重要性に着目し、他国の絵葉書発行の状況も踏まえながら日本の絵葉書について論じており、戦前期における絵葉書研究として特筆するべき成果を残している。¹¹⁾ 太平洋戦争後はしばらく空白の期間が続いたが、小森(一九七八)による絵葉書集成を皮切りに、¹²⁾ 村松(一九八〇)、六角(一九八一)、秋山(一九八八)らによる成果が続いた。¹³⁾ 中川(一九九〇)は旅と交通の視点から、¹⁴⁾ 小川(一九九〇)は産業史の視点から、¹⁵⁾ 佐藤(一九九四)は風景論の視点から絵葉書を論じている。¹⁶⁾ 富田(二〇〇五)は絵葉書を通して近代日本の歴史を浮かび上げらせ、¹⁷⁾ 浦川(二〇〇八)は絵葉書が持つ異文化の表象性を明らかにしながら、絵葉書の資料的価値について論じている。

以上が、絵葉書についての主要な先行研究の成果である。絵葉書は現在もなお身近な存在であり、一定の研究の蓄積も進みつつある。しかし、佐藤(一九九四)が指摘するように、絵葉書を主要な対象とした学術的な研究はあまり

進んでいるとは言えず、浦川（二〇〇八）もまた同様の見解を示している。¹⁸ 国家的な意志が強く作用する郵便制度や切手の研究とは異なり、絵葉書はその多くが民間業者の手によって生産されるため、全容の解明が困難なことが、その理由の一つとして挙げられるだろう。²⁰ 絵葉書の歴史は、世界や日本の近代史の歴史ともほぼ重なるが、近代史における大きな歴史的な流れの中から絵葉書をとらえ、その社会的な意味を考察していく試みは、まだまだ十分なされていないとは言えない。資料としての研究の方法を確立し、²¹ その実態を解明していく試みが待たれるところである。²²

2-2. 絵葉書が持つメディア的な特性

これまで検討してきた内容から、絵葉書が持つメディア的な特性について整理すると、おおよそ以下のようにまとめることが出来る。田邊（二〇〇二）も指摘しているように、まず挙げられるのは、絵葉書の生産者から消費者へ流れる、マス・メディアとしての特性である。生産者は絵葉書を大量に生産し、不特定多数の消費者へ販売される。特に、画像情報を伝達する手段に乏しかった時代においては、絵葉書は間違いなくマス・メディアとしての機能を果たしていた。生産者は、売り上げを伸ばすために、人々の関心を惹く題材を取り上げたから、絵葉書に印刷された図柄は、すなわち人々の興味・関心を反映するものであった。ニュースを伝える媒体としての絵葉書は、現在では既にもその役目を終えているが、名所旧跡を紹介した観光絵葉書は依然として発行され続けていることを考えると、人々の関心を惹きつけるメディア的な特性は現在に至るまで引き継がれていると考えて良い。

次に挙げられるのは、絵葉書の消費者から消費者へ流れる、パーソナル・メディアとしての特性である。絵葉書が郵便物として差し出される時、特定の差出人から特定の受取人へ情報が伝えられる。その情報は、先述したマス・メ

ディアとしての画像情報に、私信としての情報が付け加えられている。このように、絵葉書はマス・メディアとパーソナル・メディアの両方の機能を兼ね備えているという点で、新聞や写真と大きく異なっていると言える。

2-3. 絵葉書の社会的受容に関する推移

さて、絵葉書はその誕生以来、社会的にどのように認知され、受容されていったのであろうか。また、「絵葉書」の使われ方、報じられ方にはどのような推移が見られるのであろうか。

本稿では、これらを検証する指標として日本の新聞記事に着目し、具体的な方法として、読売新聞の記事検索サービス「ヨミダス歴史館」を利用した⁽²³⁾。一八九七年(明治三〇年)以前は〇件であり、一八九八年(明治三一年)から一九八六年(昭和六一年)までの累計は一、〇五〇件となっている⁽²⁴⁾。一九八七年(昭和六二年)から二〇一四年(平成二六年)までの合計は一、三一七件となっている⁽²⁵⁾。

確認出来る限り、「絵葉書」がキーワードとなった記事で最初に登場するのは、一八九八年(明治三一年)二月二日の「新年當て込みの賣物」という見出しがついた記事中である。ただ、私製葉書の発行を許可する逓信省令が出されたのは一九〇〇年(明治三三年)一〇月のことであるから、この時に売り出された「絵葉書」はまだ国内の郵便物として使用出来るものではなかったことに注目する必要がある。逓信省令以降、民間で絵葉書を作ることが出来るようになったが、その翌月の一月一七日と二二日には、絵葉書の発行に関する広告が登場し、一二月三日には新年用の絵葉書の発売広告も出されている。

一九〇二年(明治三五年)以降は、順調に絵葉書の浸透が進んでいった。そのブームは日露戦争期に頂点を迎え、

「絵葉書」関係の記事も激増し、一九〇四年（明治三七年）には五四件、一九〇五年（明治三八年）にピークの二五七件に達する。日本における絵葉書の普及は、日露戦争の勃発とその行方が大きな役割を果たしたことは、新聞報道の激増ぶりからも裏付けられる。先述したように、当時は新聞紙に写真を印刷することが技術的に困難であったので、戦場の様子を写真情報として知ることが出来る有力な手段は絵葉書であった。

日露戦争が終わると、「絵葉書」に関する記事は減少していく。一九〇六年（明治三九年）は一三五件あったが、翌年以降は三七件、二三件、二五件と落ち着いていき、大正時代に入ると年間一〇件以下まで減少する年が多くなる。しかし、絵葉書の収集ブームは依然として続いていたので、報道量の減少は、むしろ絵葉書の社会的な定着を意味しており、絵葉書の普及・定着とともにニュース性もなくなっていったと解して良い。実際、関東大震災が発生した時、被災の様相を写した絵葉書が大量に発行されたものの、「震災関連絵葉書の発売」という事実もはやニュースにはなっていない。

昭和期に入ると、絵葉書関係のニュースは再び戦時色が強まり、戦線へ絵葉書を送って慰問することに関連する記事が増えていく。太平洋戦争が始まると、絵葉書の記事も完全に戦争一色となる。しかし敗色が濃くなると絵葉書関係の記事も見られなくなり、そして敗戦を迎える。

戦後初めての絵葉書に関する記事は、一九四六年（昭和二十年）一〇月七日に確認される。⁽²⁶⁾ 平和が強調され、戦前に発行された「戦争ものの絵葉書」は存在しないかのように扱われている。⁽²⁷⁾

日本は高度経済成長期に入り、テレビ全盛の時代となっていく。一九六三年（昭和三九年）に開催された東京オリンピックの時には記念絵葉書が発売され、新聞記事となった（七月二〇日）。しかし、その後は絵葉書に関する記事そ

のものが減少していき、全く報じられない年も出るようになった。

一方、絵葉書を送る、絵葉書を受け取るといったコミュニケーションに関する記事や絵葉書の使用規則の改善を求める投書が増え、戦前期に作られた過去の絵葉書について言及する記事や広告が出現するようになる。²⁸戦後期は、古い絵葉書に関する新聞報道も増加傾向にあり、「絵葉書というメディアの再発見」が進んでいることもうかがわせる。

観光地の絵葉書に関する記事は戦前・戦後を通じて見られるが、数としてはそれぞれ二桁に届かず、散見される程度である。²⁹もつとも、観光絵葉書の膨大な発行量に留意するならば、観光絵葉書はもともとニュースにならない位にありふれた存在であるからと解して問題ないだろう。³⁰

なお、一九九五年（平成七年）に発生した阪神大震災に関連した絵葉書の記事は一一件、二〇一一年（平成二三年）に発生した東日本大震災に関連した絵葉書の記事は一四件が確認出来る。被災者に向けて応援のメッセージを送ろうといった呼びかけやチャリティ絵葉書の発行などである。助け合い、絆を深めるためのコミュニケーション・メディアとして絵葉書が再評価されていることが興味深い。

3. ハルビン絵葉書の社会的意味

3-1. 国際都市ハルビンの成立と日本人

本稿では、実際の使用事例としてハルビンに関する絵葉書を取り上げるが、まずはハルビンと日本人との関わりについて概観することにした。

現在の中国東北部、かつて満州と呼ばれた地域は、日本人にとって縁遠い地域であった。近代都市・ハルビンとし

ての起源は一八九八年（明治三二年）年に遡る。この年、帝政ロシアが露清密約によつて中国東北地域の鉄道敷設権（東清鉄道）を獲得すると、これまで寒村であったハルビンは鉄道建設の拠点となった。ハルビンは西北の満州里から南東の綏芬河に横断する東清鉄道と南から北へ流れる松花江が交差する交通の要衝に位置していたからである。鉄道建設と同時に都市建設も始まり、「極東のモスクワ」とも「東洋のパリ」とも称される、ヨーロッパ風の街並みが形成されていった。

当時の松花江河畔は一面の湿地帯であったが、まず香坊（ロシア名…スタール・ハルビン）に拠点の仮市街地が作られ、土木工事が出る残土で湿地帯を埋め立てながら松花江（同…スンガリー）方面へ都市を広げていった。秦家崗（同…ノブ・ゴード）にはハルビン駅が建設され、ロシア正教の中央寺院（ニコライ大聖堂）やロシア資本のデパート（チューリン洋行）が建設されていった⁽³¹⁾。西澤（一九九六）によると、ロシア人にとつて教会は、日本人にとつての神社・仏閣以上に重要なものであり、市街地の中心地にロシア正教会の聖堂を置くことは、きわめてロシア的な都市計画の手法である⁽³²⁾。そして、秦家崗の北側に位置する埠頭区（ロシア名…プリスタン）は、目抜き通りとなるキタイスカヤ街を中心に商業地区として整備された。これらの地区は、鉄道附属地として設定されたロシア租界であり、ロシアが自治権を握っていた。後述する傅家甸（同…フージャデン）を除けば、市街地のほぼ全てが鉄道附属地に含まれるといつても過言ではなかった。ハルビンは、清朝の領土内にありながら、事実上ロシアの「植民都市」として都市形成が進められていったのである⁽³³⁾。

東清鉄道を建設する労働力としては、中国人が多く雇われた。もともと、ハルビンが位置する満州地方は、満州族が暮らす土地であったが、山東省を中心とする多数の漢民族が労働力として満州に移動し、住み着くこととなった。

彼らは、ハルビン駅の北東に位置する松花江河畔の埋立地に、傅家甸(同・フーシャデン)という中国人の居住区を建設した。この地区は鉄道附属地の外にあつたので、自治権は清国に帰属していた。

さて、ハルビンの建設とともに、日本人がどのように進出し、どのような関わりを持つようになっていったのであろうか。

ロシアが東清鉄道の建設に着手すると、日本人も次第に進出していくようになり、⁽³⁴⁾ 日露戦争が始まる直前の一九〇三年(明治三六年)にハルビンに在住する日本人は六八一名に達していた。⁽³⁵⁾ ただし、当時のハルビンは、まだ日本と清国との条約で認められた開港場ではなかったため、日本人はロシアが管轄する鉄道附属地にロシア側の許可を得て居住せざるを得なかった。日露戦争の開戦とともに、日本人は一時的にハルビンから退去するが、戦争の終結後、再び集まり始める。

一九〇六年(明治三九年)、ハルビンは国際都市として諸国に開放された。「ウラジオストクで待機していた日本人はその開放を聞き、勇躍してハルビンに向かった」という。⁽³⁶⁾ 一九二二年(大正一〇年)頃のハルビンの人口は約三三万人で、そのうち中国人が一九万人、ロシア人が一三万人を占めていた。ロシア人の中でも、ロシア革命を逃れてきた白系ロシア人の影響が強かった。⁽³⁷⁾ 当時、ハルビンを訪れた日本人は、「駅の構外を出るともう支那などといふ気分がせず」、「見るもの聞くもの触れるものが皆んなロシアの色調を帯びて」おり、「極東のモスクワへ着いた」気分になつたと述べている。⁽³⁸⁾ その他、少数ではあるが、英、米、仏、独、伊、インド、オランダ人、朝鮮人が居住し、「殆ど世界各国人が居ると云ふ」様相を呈していた。⁽³⁹⁾ この時期の日本人は三、五〇〇人前後で推移している。

その後、次第に日本人の流入は増加していく。一九三〇年(昭和五年)時点では、ハルビンにおける日本人は

三、九一〇名であり、満州国が成立した翌年の一九三三年（昭和八年）には九、〇九六名と激増している。⁽⁴⁰⁾そして、太平洋戦争が勃発する一九四一年（昭和一六年）には五四、三二六名が、敗戦を迎えた一九四五年（昭和二〇年）には七八、六九五名の日本人がハルビンに在留していた。⁽⁴¹⁾

ハルビンは、時代が下るにつれて日本的な要素が増えていったが、日本人がハルビンに抱くイメージは、依然としてロシア正教会やヨーロッパ風の建物が建ち並ぶ国際都市であり、「異国情緒のあふれる街」「歓楽の街」として認識されていた。⁽⁴²⁾ロシア人ダンサーが彩る夜の歓楽街についても詳しく紹介され、ハルビンは、内地の日本人が訪れることの出来る「東洋の楽天地」であり「驚く可き性欲の都」として広く知られていたからである。⁽⁴³⁾

ニコライ大聖堂（中央寺院）近くの東支倶楽部には、レストランのほか、交響楽団・バレエ劇団・野外ドームが設置されていた。⁽⁴⁴⁾ロシア革命から逃れてきたオペラ歌手もハルビンに避難しており、ハルビンの音楽会は極めて質が高いものであったという。白系ロシア人は、冬は松花江で氷の洗礼をし、夏にはヨット遊びを楽しんだ。ハルビン公園には常にロシア音楽が流れていて、公園内はロシア人老若男の憩いの場であった。

昭和初期、満州旅行ブームが巻き起こり、「日支親善」と「内鮮融和」をめざして様々な旅行案内書が作成され、日本人の満州旅行を促した。日本旅行会・鉄道省・朝鮮総督府鉄道局と提携しての団体旅行も企画された。実際、修学旅行や卒業旅行として、旧制高校の生徒が満州や台湾などの外地に出かけることが流行した。一九三五年（昭和一〇年）の大阪朝日新聞（満洲版）によれば、前年に満州を訪れた日本人団体客は三七四団体、一七、二五三名にのぼったという。⁽⁴⁵⁾一九三五年（昭和一〇年）に満鉄の特急「あじあ号」の運転がハルビンまで延長されると、ハルビン旅行に一層拍車がかかることとなった。

満州国期、ハルビンの観光バスには、日本人のバスガイドだけではなく白系ロシア人の若い女性も乗務させ、日本語で露人墓地の案内をさせたりして、日本人観光客に「ハルビン情緒」を味わわせる演出も行われていた。⁴⁶ このように、日本の勢力が増しつつあっても、ハルビンは国際色が豊かで猥雑で活力のある都市であり、日本人にとって訪問してみたい街であり続けた。⁴⁷

3-2. ハルビン絵葉書の特徴

日露戦争期から太平洋戦争で日本が敗北するまでの期間、台湾・樺太・関東州など、日本が勢力下においた地域において絵葉書が多数発行された。満州地域における絵葉書も数多く、ハルビンにまつわる絵葉書も、その中の一つとして位置づけられる。

ハルビン絵葉書は、その多くが当時の都市の建築物や風景をあしらった写真絵葉書であった。⁴⁸ 都市景観を写した絵葉書は、その時代の都市の個性をうかがえるところに特徴がある。この時期、日本国内外の都市のものが多数発行され、役所、警察署、公会堂、学校などの主要建築物が多数被写体になったが、ハルビンの絵葉書は、特にロシア風の建築が多く写されており、他の満州の都市には見られない国際色豊かな異彩をひととき大きく放っていた。

ハルビンに在住する日本人も絵葉書を買って使用したと考えられるが、購入の多くを占めたのは、同地を訪問した日本人観光客であった。当時、まだ個人用の写真機は普及しておらず、持参したとしても、現地での撮影には制約が伴ったので、旅行の記念品としてはもちろん、風景を土産として持ち帰るという意味でも絵葉書を購入するのが一般的であった。一部は現地から内地への郵便に用いられ、残りは未使用のまま持ち帰られた。

内地でそれらを見た人々は、国際都市・ハルビンへの旅情をかき立てられたことであろう。その風景からエキゾチックな雰囲気を感じ取り、遠い異国の地への思いを馳せたのではないだろうか。この独特の視覚経験が、ハルビン絵葉書ならではの特徴を構成していると考えられる。

3-3. ツーリズム研究の視点から見たハルビン絵葉書の再検討

ここまでの論考を元に、ツーリズム（観光）とハルビン絵葉書との関わりについての考察を行う。

近年におけるツーリズム研究の新動向として、従来型の大衆化された画一的な観光（マスツーリズム）から多様化が進みつつある流れの一つとして、「コンテンツツーリズム」に関する研究が進みつつある。「コンテンツツーリズム」とは、映画やドラマ等の作品（コンテンツ）に関連のある場所を訪れる形態の観光（ツーリズム）とされ、「地域に『コンテンツを通じて醸成された地域固有の雰囲気・イメージ』としての『物語性』『テーマ性』を付加し、その物語性を観光資源として活用すること」とする定義が広く用いられている。⁴⁹「コンテンツツーリズムはマスツーリズムにはなりにくいものの、個人の動機において旅行行動が行われるという点で消費者の指向性が多様化した現代を象徴したツーリズム」として捉えられる。⁵⁰

「コンテンツツーリズム」は、温泉や名所旧跡巡りなど、確立された観光地を巡る一般的なツーリズムとは異なり、これまで観光地として注目されなかった場所であっても、コンテンツの題材に取り上げられ、それがメディア（特にマスメディア）によって広く流布されることによって観光行動へと結びつけられることを特色としている。

この分野における先行研究としては、コンテンツ作品をきっかけとした観光への考察を行った秋山（二〇〇五）⁵¹を

はじめ、埼玉県鷲宮町の取り組み事例から考察を加えた山村(二〇〇八)⁵²、小説、映画、漫画、アニメーション作品など様々なコンテンツ作品を対象として包括的に概観した増淵(二〇一〇)⁵³、コンテンツツーリズム研究の理論的枠組みの構築を意欲的に試みた岡本(二〇一二)⁵⁴、コンテンツ作品の要素による観光形態の分類を行った筒井(二〇一三)⁵⁵などの成果が発表されている。フィクション作品、特にアニメーション作品の題材として取り上げられた事例を取り上げた研究が多く、これまで観光地ではなかった所が観光地化していく過程が明らかにされている。

ここで、ハルビンについて言えば、「異国情緒」というイメージに基づく『テーマ性』に加えて、日露戦争期における志士の銃殺の地、伊藤博文公の遭難の地といった『物語性』の要素も付加され、日本人にとって訪れてみたい観光の目的地へと意識されるようになっていった。その意味において、ハルビンは「コンテンツツーリズム」の代表的な舞台となった街であるという仮説を提示することが出来る(これを検証する方法として、後述するように実際に使用された絵葉書の内容分析を試みることにする)。

一九二三年(大正十二年)年に発売された『ハルピン夜話』は、奔放なエロティシズムに満ちたロシア人ダンサーを描いて「裸踊りのバイブル」とも評され、一三〇版以上を重ねたベストセラーになった。満州旅行ブームも手伝って、ハルピンは「内地客に手の届くエキゾチシズムとエロティシズムを提供してくれる国際的歓楽都市」として広く知られるようになった。⁵⁶ 当時出版された旅行記の記述を見ても、日本人旅行者にとってハルピンは歓楽街でロシア人女性ダンサーを見物することが定番となっており、「哈爾濱まで行つて、かうした場所にゆかないで帰る人間はまづないといふのが、苦笑すべき事実であり」、「外国人が日本のフチャマとゲイシャ・ガールを見ないでは帰れないやうな風に、一般化・観光物化されてゐる」と記載されているように、⁵⁸ このエキゾチシズムとエロティシズムの強烈なイ

メージ（まなぎし）が、ハルビンに対する興味・関心をかきたて、現地を訪問する動機形成への大きな要素になっていたと解して良い。⁽⁵⁹⁾

ハルビン絵葉書にも、ロシア人ダンサーを描いたものやロシア人美女との交歓を題材にしたものが登場しており、ハルビンという街のイメージ形成を後押しした。⁽⁶⁰⁾

松重ら（二〇〇八）の研究によると、日本語によるハルビン絵葉書は二〇世紀初頭には出現していた。近代都市・ハルビンの建設途上が進められていた時期であり、その頃のハルビン絵葉書も、東清鉄道の列車やロシア寺院など、ロシアによって作られたものの紹介が主であり、まさしくロシアの満州進出の拠点としてのハルビンをうかがわせる内容となっている。一九二〇年（大正九年）にはキタイスカヤ街に日系資本による建物（松浦洋行）が建てられ、絵葉書の図案にもなったが、その外観は純洋風であり、「異国情緒あふれる街」としてのハルビンのイメージ形成を補強するものであった。

一九三一年（昭和六年）の満州事変、ならびに翌年の「満州国」の成立を契機に、ハルビンは大きな変貌を遂げていく。志士の碑や伊藤博文に関する絵葉書が作られ、駅前には建国記念碑が建てられてその絵葉書が作られ、哈爾濱神社が建立されてその絵葉書が作られるなど、街にも絵葉書にも日本的な要素が増えていった。しかし、観光資源としての「ロシア情緒」は維持され、内地からの観光客を呼び込んだ。

太平洋戦争の敗戦と満州国の崩壊により、ハルビンに在住していた日本人は追放されて内地に引き上げた。観光旅行は不可能となり、日本人向けの絵葉書も作られなくなった。ロシア人をはじめとする外国人も追放されてハルビンは中国人だけの街となり、絵葉書の作り手も中国人の手にとって代わられる。新中国の成立からしばらくの間は、社

会主義のもと発展するハルビンを紹介する内容であり、ソビエト連邦の影響を受けつつもロシア的な要素は消されているのが特色である。日本的な要素は街から排除されており、当然ながら絵葉書にも現れない。改革・解放期以降は、発展のシンボルとしての絵葉書ではなく、観光土産としての絵葉書の要素が強くなる。発展を続けるハルビンの紹介に加えてロシア的な要素が復活、ハルビンならではの観光資源として再評価される様子を伺うことが出来る。(表1)は、ハルビンの歴史と日本人訪問者の意識、絵葉書の推移について、戦後の状況も含めて一覽にしたものである。

3-4. 実際に使用されたハルビン絵葉書の傾向

満州国期以前に戻り、実際に使われた絵葉書の内容について概観してみたい。本稿では、日本大学文理学部情報科学研究所の研究プロジェクトで収集されているハルビン絵葉書のうち、旅行者が実際に差し出したものと判断出来るものを対象とした⁽⁶⁾。

一九一六年(大正五年)九月にハルビンから福岡宛に差し出された絵葉書には「九月二十日朝晴後曇 朝四時半に目覚め五時半に食堂に出てオートミルとビフテキを食べた 六時十分前の汽車に乗る見送り人多し途中長春に二時卅五分着こゝで露西亞時間となり時計を二十三分進め式時五十八分に針を直す 窯門(ヨーマン)といふ停車場でお湯を貰ひにブヘーに入るブヘーは露西亞と支那人との二つに分れて居る露西亞のは瓦斯で支那人のはランプであつた」と記載されていてハルビンについての感想は特に記されていないが、ハルビンの街並みの絵葉書が使われており、現地の雰囲気は伝わっている。当時の郵便局はロシアによつて運営されており、ロシアの切手が貼付されているが、絵葉書自体は哈爾濱安高洋行が発行した日本製であり、当時から既に日本人が活動していたことを裏付けている。この

表1 ハルピンの歴史と日本人訪問者の意識、ならびに絵葉書の推移

時期	日本人訪問者の意識	ハルピン絵葉書
都市建設から満州国期以前 20世紀初頭～1932年	19世紀末より帝政ロシアによって建設される。1906年に国際都市として諸国に開放され、日本人も進出を始める。(1920年代のハルピン在住日本人は3500人程度。)『ハルピン夜話』(1923年)がベストセラーとなる。内地人にも手が届く「ヨーロッパ体験」が出来る場所として関心を集める。	19世紀末より、絵葉書が世界的に流行。安価に流通可能な画像メディアとして普及。日本では日露戦争の前後で空前のブームとなる。日本語によるハルピン絵葉書は20世紀初頭には出現。この時期の絵葉書はロシアならびにロシア人の存在感が圧倒的であり、異国情緒あふれる街としてのハルピンのイメージ形成に寄与した。
満州国期 1932年～1945年	満州旅行がブームとなり、「あじあ号」の運転も延長、日本人の訪問が増える。引き続き手軽に「ヨーロッパ体験」が出来る場所であったが、日本による勢力の伸張を確認するような観光スポットも増える。	「満州国」の成立を契機として、ハルピンは「日本人の街」としての性格が強まっていった。ハルピン絵葉書は、その異国情緒を特色としつつも、次第に「日本化」していく過程を辿っていった。
改革・解放期以前 1945年～1978年	日本の敗戦により在住日本人は引き揚げる。ロシア人はオーストラリアへ追われ、中国人だけの街となる。戦後しばらくは日本との国交がなく、日本人旅行者の訪問は困難であった。	中国製の絵葉書が発行される。社会主義のもと発展するハルピンを紹介する内容であり、ソビエト連邦の影響を受けつつもロシア的な要素は消されている。日本的な要素は街から排除されており、当然ながら絵葉書にも現れない。
改革・解放期以降 1978年～2000年	再び日本人が訪問出来るようになる。ただし、日本人が大挙して向かうという状況にはならず、かつて在住していた日本人の再訪などが主であったと考えられる。	観光土産としての絵葉書が発行される。発展を続けるハルピンの紹介が主であるがロシア的な要素が復活、ハルピンならではの観光資源として再評価される。日本的な要素は復活せず。
21世紀以降： インターネット時代 2001年以降	ツーリズムの多様化、ハルピンの日本語ガイドブック(地球の歩き方)等の発行、現地のガイドの日本語対応などもあり、数ある観光目的地の一つとしてハルピンも選択されるようになる。	新規の絵葉書は発行されなくなり、入手出来る場所も限定される。絵葉書に代わり、写真を添付したメールやインターネット上のブログなどで情報が発信されるようになる。

時期はまだ観光旅行で訪れることは難しく、差出人も何らかの用命を帯びて訪れたのであろう。

旅行者による絵葉書は一九二〇年代以降から見られるようになる。一九二六年（大正一五年）六月にハルビンから京都宛に差し出された絵葉書には「あてもなく朝鮮を振出しに奉天を経てこんなところまでできてしまつて滞在すると既に五月随分変つてゐる。大連を経てかへるつもり。はるかに敬意を表します」と記載されており、放浪同然の旅行の果てにハルビンまで到達したことが綴られている。⁶² ロシア中央寺院の絵葉書が使われており、異国情緒がよく表されている。

満州国期に入ると、観光でハルビンを訪れる日本人が増加していく。現地を訪れた率直な感想が綴られているものが多い。一九三二年（昭和七年）七月にハルビンから東京宛てに差し出された絵葉書には「ハルビン之市中ハ裏面之様です。露人之多いのには恐いて居ます」と記載されている。キタイスカヤ街の絵葉書が使われており、ロシア人が多いことに驚いているというコメントと共に、ロシア風の街並みを受取人に伝えようとしている。

一九三六年（昭和十一年）一月にハルビンから東京宛に差し出された絵葉書には「長春ヨリ貴地へ旅行致。露国帝政時代ト異リ支那人ノ鼻息ノ荒キコトニハ一驚ヲ喫シ申候。哈尔賓名物『シヤンタン』ダンスヲ土産ニ見テ帰ル積リニ御坐候」と記載され、ロシア人ダンサーによるダンスを見物したことが書かれている。使われた絵葉書も若いロシア人女性があしらわれた図柄が選ばれており、ロシア人女性に対する「まなざし」が伝わってくる。ダンスについて言及した絵葉書は、他に幾つも確認することが出来る。

一九四〇年（昭和十五年）九月にハルビンから東京宛に差し出された絵葉書には「拝啓 其後御変りありませんか。私も元氣で目下全満旅行中です。齊々哈爾、哈爾賓と廻つて、此から綏芬河・羅津の方に赴く予定です。ハルピンは

異国情趣たつぷりの街で通行の露助のメツチエンに心も眼も奪はれて居る始末です。」と記載されている。使われた絵葉書はソフィスカヤ寺院の図柄であるが、やはりロシア人女性に対する「まなざし」が印象に残る。

太平洋戦争が始まった後も、戦局が悪化するまでは観光旅行が行われた。一九四三年（昭和一八年）五月にハルビンから千葉宛に差し出された絵葉書には「昨日十二時四十七分ハルピン着。今日は観光バスで市中を見學。人口八十万その内日本人は八万人。大阪を三つ併せた位の面積である。エハガキが実に少ない。送ったものは皆保存しておきなさい」と記載されており、絵葉書の不足が始まっている様が綴られている。使用された絵葉書も、市販のものが入手出来なかったためか、市内観光バスの乗車券の半券（絵葉書として使えるものでソフィスカヤ寺院があらわれている）を利用している。

これら現地から実際に差し出された絵葉書を概観すると、現地を訪れた感想が率直に綴られたものが多く、絵葉書は現地の様子をビジュアル的に伝えるメディアとして機能している。絵葉書の絵柄と対応した記述も目立ち、写真つき電子メール（写メール）的な使われ方がなされていたと判断して良い。

4. まとめと今後の課題

絵葉書は、出現した時代においては、数少ない視覚的情報伝達メディアであり、発行数も多く、比較的廉価で買い求めることの出来る大衆的なメディアであり、それゆえ収集の対象として圧倒的に人気を集めるメディアであった。また、絵葉書は郵便制度の周辺にあつて、切手ほど国家政策と密接に関わるものではないが、一定の政治的影響を受けつつ、人々とのコミュニケーションや消費文化を反映するメディアであった。⁽⁶³⁾特に写真絵葉書は、その視覚情報か

らリアリティを与えられ、対象を見たという気分させる特性を有している。観光地で買い求められた絵葉書は、一部は実際に使用され、未使用の絵葉書もそのまま持ち帰られ、多くの人達の目に触れることになった。絵葉書の普及は、印刷がもたらした大量生産による大衆化であり、郵便制度がもたらしたコミュニケーションの新しい形態の一翼を担うものであり、写真がもたらした視覚情報の拡大であった。

本稿で事例として採りあげたハルピンは、戦前期においては「極東のモスクワ」「東洋のパリ」と称されえる街であり、当時の日本人にとって安全に到達出来る「身近なヨーロッパ」であった。満州旅行ブームも手伝って、多くの日本人が実際にハルピンを訪問した。『ハルピン夜話』に代表される小説が文字情報から異国情緒をかき立てるメディアであるならば、ハルピン絵葉書は視覚的な画像情報を伝えるメディアとして同様に機能した。都市建設から日が浅く、歴史的・伝統的な観光資源が存在しないハルピンは、これらのメディアによって魅力が周知された。近年、メディアによって地域のイメージが形成され観光が喚起される「コンテンツツーリズム」への注目が高まりつつあるが、ハルピン絵葉書は「コンテンツツーリズム」創出の先駆けをなすものの一つであったと考えられる⁽⁶⁴⁾。

今後の課題として、これまでに得られた成果をさらに発展させ、絵葉書の実例の使用例の分析を一層推し進めてハルピン絵葉書の全貌に迫り、そこから得られる知見をもとに近代以降における日本人のコミュニケーション形態ならびに意識の変容を解明していきたい⁽⁶⁶⁾。本稿では絵葉書を対象としたが、雑誌や画報、パンフレット、土産用写真など、絵葉書以外の画像資料の蓄積と分析も重要であり、併せて取り組んでいくつもりである⁽⁶⁷⁾。

二一世紀以降はインターネットの普及に伴い、新規の絵葉書は作られにくくなっている。写真つき電子メール(写メール)の一般化に伴い、絵葉書の果たしたメディア的な役割もインターネットに代替されるようになり、絵葉書は

急速に時代遅れのものになりつつある。今後、絵葉書はどのような形で存続していくのかについて注目しつつ、絵葉書の果たした歴史的な役割についての再評価を進めていきたい。

注記

- (1) スマートフォン (smartphone) は、一般にインターネットとの親和性が高い多機能の携帯型電話機のことを指し、二〇〇四年 (平成一六年) 頃より携帯電話に置き換わる形で普及が進んでいる。電話機の一つであるが、中身は小型コンピュータそのものである。ほとんどの機種にカメラ機能が搭載されており、インターネット上のサービスを用いて活用することが出来るようになっていく。
- (2) 携帯電話 (PHSを含む) にカメラ機能が初めて搭載されたのは一九九九年 (平成一一年) のことであり、それ以降に発売された機種やスマートフォンのほとんどにカメラ機能が搭載され、電子メールに添付して送ることが出来るようになっていく。なお、「写メール」はソフトバンクモバイル (開始当時はJフォン) の登録商標である。
- (3) 「ハルビン」は「ハルピン」と表記されることがあり、漢字でも「哈爾濱」「哈爾賓」「哈爾浜」等の揺れが見られるが、本稿では書名など固有の表記を除いて「ハルビン」に統一する。
- (4) 映画のロケ地を訪問する観光形態として「フィルムツーリズム」という用語があるが、「コンテンツツーリズム」は映画に加えて小説やドラマ、漫画等も含めた作品群 (コンテンツ) 全般を対象として再構築されつつある概念である。
- (5) 絵葉書の起源は一八七〇年頃のドイツに発するとされ、私製の絵葉書はドイツでは一八七二年に、一八七三年にフランス、一八九四年にイギリス、一八九八年にアメリカの順で認可されていった。日本で絵葉書の使用が認められるようになったのは一九〇〇年 (明治三十三年) 一〇月のことである。
- (6) 田邊 (二〇〇二) は、当時の絵葉書は現在とは比較出来ないほど重要なメディアであったと指摘し、絵葉書の持つ情報伝達能力の高さ、特に差出人と受取人を結びつけるメディアとしての能力の高さを評価している。

- (7) 柏木（二〇〇〇）は、日本の絵葉書について、美人絵葉書というべきもの、風景・名勝を撮った観光絵葉書というべきもの、事件や出来事を撮ったものという三つの系統に分類している。その上で、初期の絵葉書は、第三の系統が主流であり、絵葉書は今日のグラフィズムの持つ機能を最初に担ったメディアの一つであったと指摘している。
- (8) 関東大震災に関する絵葉書を写真ジャーナリズム史として論じた部分は、木村・石井編（一九九〇）の一三五～一六六ページの部分に詳しい。
- (9) 橋爪（二〇〇六）は、絵葉書の草創期におけるメディアとしての役割に着目しており、「画像入りの私信」という観点から、当時の絵葉書と現代の写真添付つき電子メールの間に類似性を見いだしている。
- (10) この文献は一九三六年に日本郵券倶楽部から発行されたが、一九八三年に復刻版が岩崎美術社から刊行されている。本稿では復刻版について参照した。
- (11) 樋畑は実際に逋信行政にも関わり、記念絵葉書の作成にも携わっている。佐藤（一九九四）は、絵葉書の作成側としての経験を踏まえてまとめられた文献としては、ほとんど唯一のものであると評価している。
- (12) この絵葉書集成『絵葉書 明治・大正・昭和』は、明治・大正・昭和期の絵葉書を網羅的にまとめた資料として、後続する研究に大きな影響を与えた。
- (13) 秋山（一九八八）らによる成果は、おもに美術史としての観点から絵葉書を分類している。
- (14) 中川（一九九〇）は、元来鉄道史研究の関心から絵葉書を収集していたが、絵葉書のもつ史料性の幅広さに気づき、旅と交通の観点から論考を深めた。
- (15) 小川（一九九〇）は、印刷技術の発達と絵葉書の隆盛を追いかけるなど、産業史の観点からも絵葉書に着目しており、明治期における絵葉書の起源と発達を整理している。
- (16) 佐藤（一九九四）は、主に風景論の視点から絵葉書を論じた。絵葉書に着目した研究については、収集家による収集の蓄積と出版が絵葉書研究のための素材を提供したと評価する一方、組織的な分析はまだ手つかずのままであるとも指摘している。
- (17) 富田（二〇〇五）は、日本の絵葉書の多様性に言及しつつも日本の絵葉書の歴史は日本の近代化の歴史を反映するもので

あり、また戦争の歴史を反映するものであったとしている。

(18) 佐藤（一九九四）によると、絵葉書の研究が進まなかった理由として、各々の専門領域から派生した関心をもとに絵葉書を論じた感が強く、相互に絡み合うような考察はあまり行われてこなかったからである、と指摘している。二一世紀に入ると絵葉書の体系的な研究も進むようになり、貴志（二〇〇六、二〇〇七、二〇〇八）の成果が挙げられるが、比較的最近のことである。

(19) 浦川（二〇〇八）は、これまでの絵葉書研究の動向を整理し、一定の進展はみているとしたが、それでもなお、現時点では個々の研究が芽を出して来ている段階に過ぎず、絵葉書の史料性に関する理解も共通認識になっていないと指摘している。

(20) 切手と国際政治の関係について論じたものには、内藤（二〇〇六）の論考がある。内藤は満州国における郵便制度を事例とし、中国をはじめとする諸国にどのような政治的力学が働いたかについて考察を行っている。

(21) 田邊（二〇〇二）は、絵葉書が歴史史料として広く使われるようになるためには、絵葉書のテキスト批判の方法論が確立されなくてはならないと指摘している。

(22) このほか、絵葉書趣味の普及と研究を目的とした「日本絵葉書会」が二〇〇二年（平成一四年）に設立され、継続的な活動を行っている。同会は絵葉書の収集を趣味とする愛好家の団体であるが、学術的な研究活動も力が入れられている。

(23) 「ヨミダス歴史館」(<http://www.yomidas.jp/rekishikan/>)は、一九八六年（昭和六一年）以前と以降ではシステムが異なっており、前者は見出しと記事に関連付けられたキーワードで検索するのに対し、後者は見出しおよび記事を全文検索出来るようになってきている。すなわち、前者は絵葉書に関する記事を効率的に検索出来る一方、記事中に「絵葉書」が使われていてもキーワードで関連付けられていない記事は拾い出すことが出来ず、後者は全文検索が可能であるので検索漏れがない一方、記事中に「絵葉書」が使われていれば拾われるため、特に絵葉書について言及していない記事も拾い上げてしまう特徴がある。

(24) データベース検索においても、用語の揺らぎも考慮し、「絵葉書」「絵はがき」「えはがき」のキーワードで検索した。

(25) 同じく用語の揺らぎも考慮し、「絵葉書」「絵はがき」「えはがき」のキーワードで検索した。

(26) これは「絵葉書について書かれた本の刊行」を紹介する記事で、「きれいに彩色された異国風な絵はがきといふよりはな

つかしい銅版画をみるやうなまことにこのましい本である」と表現されている。

(27) 例えば、一九四七年（昭和二十年）六月一九日に出された戦後初めての絵葉書広告には「平和観光日本への躍進！絵葉書の御用意は是非当店へ」と書かれており、平和が強調されている。

(28) 例えば、一九七八年（昭和五三年）の京都市電に関する記録では、戦前期に作られた京都市電の絵葉書について言及されたほか、一九八一年（昭和五六年）七月二七日には新刊書籍（『絵はがきが語る明治・大正・昭和史』）の広告が掲載されている。

(29) 新聞紙面上での観光絵葉書の初出は、戦前是一九〇二年（明治三五年）八月三〇日の湘南絵葉書が、戦後是一九五二年（昭和二十七年）二月一〇日の上野・浅草絵葉書の発行を知らせる記事が確認出来る。

(30) これまでに発行された絵葉書の全容に迫る先行研究は見あたらないが、戦前・戦後を通じて、絵葉書が発行されない観光地がほとんど見あたらないことから、絵葉書の総発行数に占める観光絵葉書は極めて大きな割合を占めていることは容易に推察される。全容の解明に少しでも迫っていくことが今後の課題であると考えられる。

(31) 秦家岡（ノブ・ゴロド）地区は、現在もハルビンの行政・経済の中心を占めている。西澤（一九九六）二四ページを参照。

(32) 西澤（一九九六）二三ページを参照。

(33) 「植民都市」ハルビン建設の経緯は、上田（二〇〇七）一四一ページや、日本大学文学部資料館編（二〇〇九）二ページに詳しい。

(34) 中村（一九二六）によると、「日本人が此の地に始めて乗り込んだのは一八九七年（明治三〇年）の五月で東清から雇われた平光彌八と云ふ洗濯屋であった」という。商人のほか、いわゆる日本人売春婦の進出も早かったという。

(35) 塚瀬（二〇〇四）一〇ページを参照。出典は「清国在留本邦人職業別表」『通商彙纂』改四六号から。ハルビンを含む全満州に在住する日本人は、総計二、五二五名であり、ハルビンはそのうち六八一名を占め、七七五名の旅順に次ぐ人数であった。

(36) 同上、一六ページを参照。

- (37) ただし、ロシア（ソ連）が握っていたハルビンの行政権、司法・警察権の実権は、一九二二年（大正一〇年）に中国（中華民國）側に移っている。ロシア（ソ連）は、東支鉄道の半分の権利を確保していた。
- (38) 一九二三年（大正一一年）七月二一日付『京城日報』に記述がある。
- (39) 中村（一九二六）四ページを参照。
- (40) 同上、四七ページを参照。
- (41) 佐久間（一九九七）五八ページを参照。佐久間の研究によると、敗戦時における満州全体での在留日本人口は一五四万九、七〇〇人である。
- (42) これは、後述するように一九二三年（大正一二年）に奥野他見男によって著されてベストセラーになった『ハルピン夜話』の影響が大きいとされる。
- (43) 奥野（一九二三）一八ページを参照。「同じ満州でも一步ハルピンへ入ると、斯うも天地が変はるものか、自由が許されてあるのかと驚かされて了った。巡查などは一人も居らぬ、魔性のものの横行闊歩の天地である。」とも述べている。
- (44) 後藤（一九七三）一〇七ページを参照。
- (45) 一九三五年（昭和一〇年）一月二三日付大阪朝日新聞（満洲版）を参照。日本人観光客は、満州を訪れる外国人観光客の九六%を占めたという。
- (46) 高媛（二〇〇二）二四一ページを参照。
- (47) 例えば、昭和一七年に発行されたハルビン駅前をあしらった絵葉書にも「あこがれの都ハルビン」というキャプションが添えられている。戦時中においても、あこがれの都として認知されていたことが分かる。
- (48) ハルビン絵葉書にはニュース性のある絵葉書はほとんど見られず、概ね都市の風景を写した観光用・土産用である。大正から昭和期にかけては、ニュースを報じる事件絵葉書は減少傾向にあったこと、日本国内からみてハルビンは外地の遠方に位置していたことなどが要因であろう。
- (49) この用語は、二〇〇五年（平成一七年）に国土交通省総合政策局・経済産業省商務情報政策局・文化庁文化部から出され

- た『映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査』で用いられてから広く採用されるようになった。
- (50) 増淵 (二〇一〇) によると、コンテンツ・ツーリズムは、主に地域振興や観光まちづくりの観点からの研究と実践が進みつつある領域である。
- (51) コンテンツ作品を「物語」と見なし、その消費と観光を結びつけようとした萌芽的考察である。
- (52) 山村 (二〇〇八) は、『らき☆すた』を題材として着目し、そのモデルとなった場所が「聖地」として成立する過程を整理し、次世代ツーリズム形態としての可能性を論じている。
- (53) 増淵 (二〇一〇) は、コンテンツ作品が作る地域イメージにも着目し、「湘南ブランド」の形成に歌やドラマなどの多様なコンテンツ作品が大きく影響していることを実証的に明らかにした。
- (54) 岡本 (二〇一二) は、マスメディアの記事内容の分析からコンテンツ作品と観光の結びつきの起源を探ったほか、山村と同じく『らき☆すた』を主要な事例として多くの論文を発表している。
- (55) 筒井は、作品において現実の地名が明示されない作品をA型、明示される作品をB型とし、B型は地元の間与レベルによってさらに三タイプに分類している。筒井 (二〇一三) 一六ページを参照。
- (56) 高媛 (二〇〇二) 二四二ページを参照。ハルビン観光においてロシア人女性が欲望消費の対象として浮上したのは、『ハルピン夜話』のベストセラーが火付け役になったとしている。
- (57) 米家 (二〇一四) 三三三ページを参照。米家は、当時出版された旅行記一七五点を分析し、当時のツーリズム空間の形成とそこを訪問する日本人の意識について明らかにしている。
- (58) 春山 (一九四〇) 二二三ページを参照。
- (59) J. アーリ (一九九〇—一九九五) は、「まなざし」の概念を用いて観光についての概念を提示している。近代の観光は、観光客がその地に対して抱く「まなざし」(イメージや先入観念Ⅱ記号) によって構築されるとした。
- (60) ハルビン絵葉書のひとつに「歓楽の都市ハルビンに遊ぶ」と題された組み物の絵葉書セットがある。それは、日本人男性がハルビンを訪れ、二人のロシア人美女を同伴して市内遊覧を楽しむという設定となっており、ハルビンに旅行すればロシア

人女性と交歓出来るかのようなイメージを発するものとなっている。

(61) 日本大学文学部情報科学研究所で推進されている研究プロジェクト「東アジアにおける都市形成プロセスの統合的把握とそのデジタル化をめぐる研究」では、ハルビン絵葉書に関するデジタルアーカイブが構築されており、その一環として実際に使用された絵葉書も収集している。本稿執筆時点における分析対象は二二一枚である。

(62) この頃の郵便は中国（中華民国）が担っており、中華郵政の切手が貼付されている。絵葉書自体は日本製である。

(63) 官製の絵葉書は戦勝を記念するものなど政治的な影響を大きく受けており、民間が発行する私製の絵葉書も一定の影響を受けたと考えられる。満州国期に哈爾濱觀光協会が発行したパンフレットを見ると、忠霊塔、志士の碑、伊藤博文遭難の地や哈爾濱神社など、「日本的なもの」を強く推奨しており、この時期に作成された絵葉書も「日本的なもの」が増えている。しかし、実際に使用された絵葉書は「ロシア的なもの」が多いように見受けられる。この実態の把握が今後の課題である。

(64) もちろん、絵葉書を見ただけで観光行動へと直結するものではなく、意思決定に至るまでには雑誌や画報の情報をはじめとする様々なメディアからの情報が複合的に影響しているものと考えられる。それぞれの影響度の強さを解明していくことが今後の検討課題である。

(65) ハルビン絵葉書デジタルアーカイブ構築に関する研究報告としては、二〇〇七年（平成一九年）七月の公開シンポジウム、二〇〇八年（平成二〇年）年三月の公開シンポジウムのほか、二〇〇八年（平成二〇年）十一月の「JAPEX'08 満州東北切手展」における成果発表や二〇〇九年（平成二一年）年一〇月の展示会・講演会、二〇一二年（平成二四年）年一〇月の資料展示会「描かれた〈満・蒙〉―「帝国」創造の軌跡―」などがある。

(66) 本稿では主に旅行者が書き綴った絵葉書を対象としたが、現地に在住する日本人や軍事郵便として使用された絵葉書の分析は、別の稿にて論じたい。

(67) 本稿では分析の対象としなかったが、当時発売されていた雑誌や画報にもハルビンを特集した写真つきの記事が見受けられる。また、ロシア人女性を写したブロマイド写真も人気を博したとされるが、その実態はほとんど明らかになっていない。これらを解明していくことも今度の課題である。

参考文献

- 秋山公道編 (一九八八) 『絵はがき物語』, 富士短期大学.
- 秋山綾 (二〇〇五) 『物語消費』型観光への基礎的考察』日本観光研究学会全国大会論文集二〇.
- Urry, J. (一九九〇) *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*. London: Sage Publications. (アーリ,
J 『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行—』加太宏邦訳, 法政大学出版社, 一九九五).
- 上田貴子 (二〇〇七) 『哈爾濱の日本人』(山本有造編 『満州』記憶と歴史), 京都大学学術出版会.
- 岡本健 (二〇一三) 『コンテンツツーリズム研究の枠組みと可能性』『観光資源としてのコンテンツを考える—情報社会における旅行行動の諸相から』CATS叢書七, 北海道大学観光学高等研究センター.
- 小川寿一 (一九九〇) 『日本絵葉書小史 (明治編)』, 表現社.
- 奥野他見男 (一九三三) 『ハルビン夜話』, 潮文閣.
- 柏木博 (二〇〇〇) 『肖像のなかの権力 近代日本のグラフィズムを読む』, 講談社.
- 貴志俊彦 (二〇〇六) 『東アジアを描く非文字資料のデータベース化』『歴史と地理No.五九四 (世界史の研究 二〇七)』, 山川出版社.
- 貴志俊彦 (二〇〇七) 『満洲国の情報宣伝政策と記念行事』(平野健一郎編 『日中戦争期の中国における社会・文化変容』, 東洋文庫).
- 貴志俊彦 (二〇〇八) 『戦争とメディアをめぐる歴史画像デジタル化の試み—満洲国ポスター&伝単データベース』『アジア遊学』第一一三号, 勉誠出版.
- 高媛 (二〇〇二) 『楽土を走る観光バス—一九三〇年代の満洲都市と帝国のドラマトゥルギー』(吉見俊哉編 『岩波講座 近代日本の文化史 拡大するモダニティ』), 岩波書店.
- 越沢明 (一九八九) 『哈爾濱の都市計画』, 総和社.
- 後藤春吉編 (一九七三) 『ハルビンの想い出』, 京都ハルビン会.

- 小森孝之（一九七八）『絵葉書 明治・大正・昭和』、国書刊行会。
- 佐久間真澄（一九九七）『記録 満州国の消滅と在留邦人』、のんびる舎。
- 佐藤健二（一九九四）『風景の生産・風景の解放』、講談社。
- 田邊幹（二〇〇二）『メディアとしての絵葉書』、『新潟県立歴史博物館研究紀要』（三） 七二―八三。
- 塚瀬進（二〇〇四）『満洲の日本人』、吉川弘文館。
- 富田昭次（二〇〇五）『絵はがきで見る日本近代』、青弓社。
- 中村義人（一九二六）『哈爾濱乃概念』、哈爾濱日本商業会議所。
- 西澤泰彦（一九九六）『図説「満州」都市物語』、河出書房出版社。
- 日本大学文学部資料館編（二〇〇九）『写された満州―デジタルアーカイブから甦る哈爾濱都市空間―展示図録』、日本大学文学部資料館。
- 橋爪紳也（二〇〇六）『絵はがき一〇〇年 近代日本のビジュアル・メディア』、朝日新聞社。
- 哈爾濱特別市公署編（一九三七）『康德三年版 哈爾濱特別市政概要』、哈爾濱特別市公署。
- 春山行夫（一九四〇）『満州風物誌』、生活社。
- 樋畑雪湖（一九八三）『復刻版 日本絵葉書思潮』、岩崎美術社（復刻版…原本は一九三六年発行）。
- 細馬宏通（二〇〇六）『絵はがきの時代』、青土社。
- 増淵敏之（二〇一〇）『物語を旅する人々―コンテツ・ツーリズムとは何か―』、彩流社。
- 松重充浩・千葉正史・林幸司（二〇〇八）『日本大学文学部情報科学研究会蔵「ハルビン絵葉書（黒崎コレクション）デジタルアーカイブ」構築の試みについて』、『近現代東北アジア地域史研究会 NEWS LETTER』（一〇）二八―三七。
- 村松貞二郎監修（一九八〇）『街 明治・大正・昭和―絵葉書に見る日本近代都市の歩み一九〇二―一九四一―2 関東』、都市研究会。
- 山村高淑（二〇〇八）『アニメ聖地の成立とその展開に関する研究…アニメ作品「らき☆すた」による埼玉県鷲宮町の旅客誘致

に関する一考察」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』Vol.7, 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院.

米家泰作（二〇一四）「近代日本における植民地旅行記の基礎的研究…鮮満旅行記にみるツーリズム空間」『京都大学文学部研究紀要』（五三），三一九―三六四.

六角弘（一九八一）『絵はがきが語る明治・大正・昭和史』上・下，ビッグ社.